

Notes on *Acilius kishii* Nakane (Coleoptera:  
Dytscidae) in 2006

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 保科, 英人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/1428">http://hdl.handle.net/10098/1428</a>

# 2006 年度におけるヤシャゲンゴロウの生息状況について

Notes on *Acilius kishii* Nakane (Coleoptera: Dytiscidae) in 2006

保科英人

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 福井大学教育地域科学部地域環境講座

## I. はじめに

ヤシャゲンゴロウ *Acilius kishii* Nakane, 1963 は、世界で南越前町(旧今庄町)の夜叉が池にのみ生息するゲンゴロウである。ヤシャゲンゴロウの保全に関する法的規制や分類学的変遷に関しては、保科&井上(2005; 2006)で述べているので、そちらを参照して頂きたい。著者は、2004年度からヤシャゲンゴロウの個体数調査を始めた。2006年度はその3年目に当たる。2005年度のヤシャゲンゴロウの個体数は、2004年度のそれと比べて、大幅に減少したらしいことは、既に保科(2006)で報告済みである。本稿では、その減少傾向が2006年度も継続したのかどうかを中心に述べることにしたい。

## II. 方法

調査方法は、保科(2006)とほぼ同様なので割愛する。ただし、ポイント④を、水際に低木が自生する位置から、高木が群生する位置へと変更した。これは、2005年度の調査で、高木の林縁側の水際に、水中に倒れ込んだ倒木などが目立ち、それゆえにヤシャゲンゴロウの個体数が多くカウントされたからである。よって、このエリアの個体密度をより正確に測るため、調査ポイントを1つ増やした。また、それに伴い、ポイント⑧~⑬を、少しずつ岐阜県側へシフトさせた。2006年度にコドラートを設置した調査ポイントの位置を、図に示した。なお、この図は、今庄町(1979)に掲載された夜叉が池の測量図を一部改変したものである。

## III. 結果

結果を表1と2に示す。保科(2006)では、2005年度の6月と8月の調査時にカウントされた幼虫の個体数を表に示したが、2006年度の調査日時では、幼虫を確認できなかったため、成虫の個体数のみを掲載している。イモリやモリアオガエルのオタマジャクシの個体数や、特定の地点での水深、池周辺の気温及び湿度、池の水温などのデータも採ってあるが、本稿では割愛している。

2006年度の調査結果のおおまかな傾向は、8月以降、つまり、新成虫の出現以降の調査時に、カウントされた個体数が少なかったことがあげられる。また、ミジンコ類は初夏に個体数のピークがあり、酷暑の盛夏以降は、個体数が減少したことは、2004年度および2005年度と同様の傾向である。ただし、水4リットル当たりに含まれていたミジンコ類の個体数は、2005年度と比べて、約半数となった。

#### IV. 考察

2006年は、夜叉が池パトロール隊員の方々や、福井森林管理署、このほか様々な関係者が「今年はゲンゴロウが少ない」と口を揃えた年であった。また、盛夏以降にイモリがほとんど姿を消してしまうなど、夜叉が池登山のベテランをして「こんな年は初めてだ」と言わしめる年であったようだ。

ヤシャゲンゴロウの幼虫の発生時は、ほぼ梅雨と重なる。それゆえに、大学の本務の合間に夜叉が池で調査している著者としては、梅雨の合間をぬって行わざるを得ない幼虫の調査は、毎年非常に困難である。2006年度は、幼虫が池の中で見られるようになった時期が例年より遅かったようで、著者は白布コドラートによる幼虫個体数の調査はできずじまいであった。ただし、関係者の観察や、本研究の結果で示した8月以降の新成虫が少なかったことなどを総合すると、2006年度は、産まれた幼虫の個体数そのものが少なかった可能性が高い。これは、保科(2006)で報告した2005年度時の考察と同様である。

成虫の減少傾向は、残念ながら2006年度も続いたと言ってよいだろう。9月25日の数値で、保科&井上(2005)と同じ方法で、池全体のヤシャゲンゴロウの個体数を大雑把に推定すると、100～数百匹と言う、相当低めの数値となった。この数値は、保科(2006)で述べたように相当乱暴な推定によるものだから、その信憑性には深く触れない。だが、本来なら最もヤシャゲンゴロウの成虫が見られるポイント⑭～⑳地点で、2006年9月25日の調査では、1m<sup>2</sup>あたり0.3匹弱しか確認されなかった。2004年と2005年の同時期、同調査ポイントでは、両年度とも約1.2匹だったから(保科&井上, 2006; 保科, 2006)、2006年度の個体数の少なさが理解できよう。これは、前述のように、2006年度に産まれた幼虫が少なかったことが1つの要因と思われるのだが、その理由は不明としか言いようがないのが事実である。

ミジンコ類の個体数も減少傾向が続いている。III.の結果で、2006年度の4リットルあたりのミジンコ類の個体数は、2005年度の約半分と述べたが、2005年度のデータが、2004年度の約半分なのだから、2006年度は、2年前の約4分の1に低下してしまったことになる。この理由も現状ではわからない。そもそも、ミジンコ類の個体数は、人為的影響を原因とする長期減少傾向にあるのか、許容範囲内の自然な年次変動にすぎないのか、明確に断定することはできない。今後も長期的な調査が必要とされるだろう。

ただし、ヤシャゲンゴロウに関して言えば、何らかの人為的要因によって、現在絶滅の危機にあることだけは間違いなさそうである。保科&井上 (2006) で述べたように、具体的な数値としては比較ができないが、地元関係者の話を総合すると、ここ1、2年のヤシャゲンゴロウの個体数は、10年以上前と比較して極めて異常に少ないことだけは確からしいからだ。本稿では示さなかったが、福井森林管理署が所有する池の水温のデータで見ると、地球温暖化が、夜叉が池の水温にダイレクトにもたらしている影響は顕著には出ていないようだ。ただし、ヤシャゲンゴロウは他のゲンゴロウと異なり、水面下に落下する昆虫類への依存が高いと推測され (保科&井上, 2005)、地球温暖化が、夜叉が池周辺の樹上に生息する昆虫類に負のファクターとして働いた場合は、ヤシャゲンゴロウも重大な影響を受けるだろう。ちなみに、著者は、2006年度から、簡単なルートセンサス法による、水面下に落下した陸生昆虫類の調査を始めた。

2006年度から、ヤシャゲンゴロウの人工増殖プロジェクトが始まった。これらの人工飼育個体を夜叉が池にすぐに放流する計画は今のところないが、ヤシャゲンゴロウの現状は、「飼育技術の確立は急務である」と言わなければならない段階に、不幸にも入ってしまったように思える。今後も、ヤシャゲンゴロウの保全のためには、夜叉が池の同種の自然個体群に対する追跡調査を続けていく必要があるだろう。

## V. 引用文献

今庄町, 1979. 今庄町誌編さん委員会編. 福井県今庄町誌. 1524 pp.

保科英人, 2006. 2005年度におけるヤシャゲンゴロウの生息状況について. 日本海地域の自然と環境, (13): 1-6.

保科英人&井上友美, 2005. ヤシャゲンゴロウの現状 (I). 甲虫ニュース, (152): 13-21.

保科英人&井上友美, 2006. ヤシャゲンゴロウの現状 (II). 甲虫ニュース, (153): 11-19.

表1 調査日別のゲンゴロウ成虫と幼虫の個体数

調査地点	6月16日(成虫)		8月3日(成虫)		9月25日(成虫)		10月31日(成虫)	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
①	0	0	0	0	0	0	0	0
②	0	0	0	0	0	0	0	0
③	0	0	0	0	0	0	0	0
④	0	1	0	0	0	0	0	0
⑤	2	0	0	0	0	2	0	0
⑥	0	0	0	0	1	0	1	0
⑦	6	4	0	0	1	2	0	2
⑧	0	0	0	0	0	0	0	0
⑨	1	0	0	0	0	0	0	0
⑩	1	0	0	0	0	0	0	0
⑪	0	2	0	0	0	0	0	0
⑫	0	1	0	0	0	0	0	0
⑬	0	0	0	0	0	0	0	0
⑭	0	0	0	0	0	0	0	0
⑮	1	2	0	0	0	0	0	0
⑯	1	1	0	0	0	0	1	0
⑰	2	0	0	0	1	0	1	0
⑱	0	1	1	0	0	1	0	0
⑲	0	0	0	0	0	2	0	0
⑳	2	0	0	0	0	0	1	0

表2 調査日別の水4リットル中のミジンコ類の個体数

6月16日	87
8月3日	41
9月25日	31
10月31日	8

図 コドラートを設置した調査ポイント地点

